

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 13年1月 ～景気の底打ちを再確認

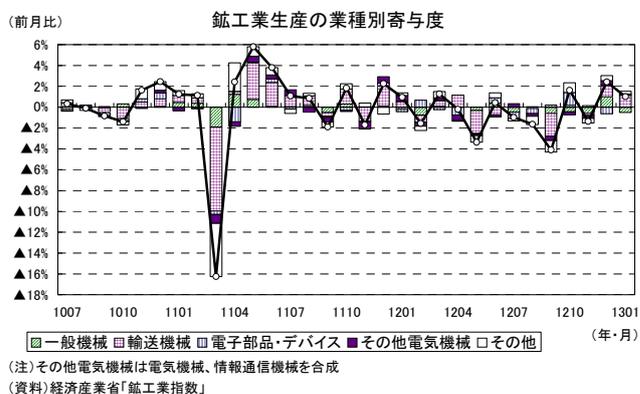
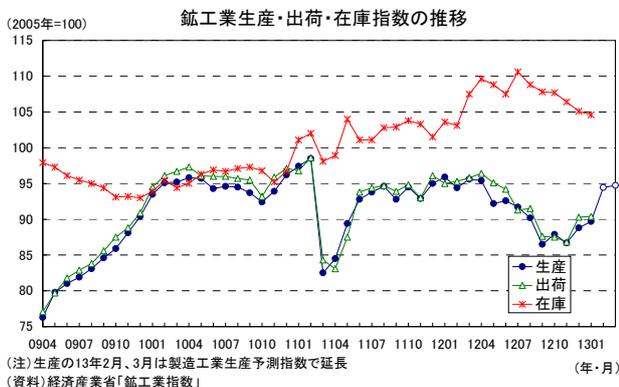
経済調査部門 経済調査室長 齋藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

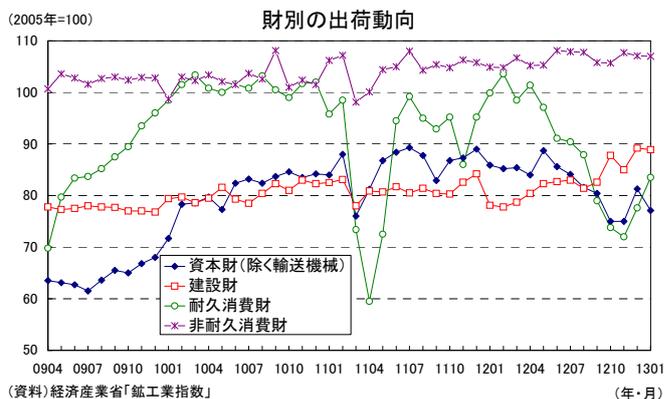
1. 生産は2ヵ月連続の上昇

経済産業省が2月28日に公表した鉱工業指数によると、13年1月の鉱工業生産指数は前月比1.0%と2ヵ月連続の上昇となったが、先月時点の予測指数の伸び（前月比2.6%）、事前の市場予想（QUICK集計：前月比1.5%、当社予想は同0.9%）は下回った。出荷指数は前月比0.1%と2ヵ月連続の上昇、在庫指数は前月比▲0.5%と6ヵ月連続の低下となった。在庫循環図上は引き続き「在庫調整局面」にあるが、在庫調整は順調に進展している。

1月の生産を業種別に見ると、国内販売の持ち直しや米国向け輸出の堅調を背景に輸送機械が前月比6.8%と12月（同6.8%）に続き高い伸びとなったほか、自動車との関連性が高い鉄鋼も前月比6.6%の高い伸びとなった。一方、内外の設備投資の弱さを反映し一般機械は前月比▲4.1%と落ち込んだ。速報段階で公表される16業種中、9業種が前月比で上昇、7業種が低下した。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は12年10-12月期の前期比▲6.0%の後、13年1月は前月比▲5.2%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は12年10-12月期の前期比6.1%の後、13年1月は前月比▲0.3%となった。1月はともに前月比で低下したが、10-12月期と比べると資本財が同水準、建設



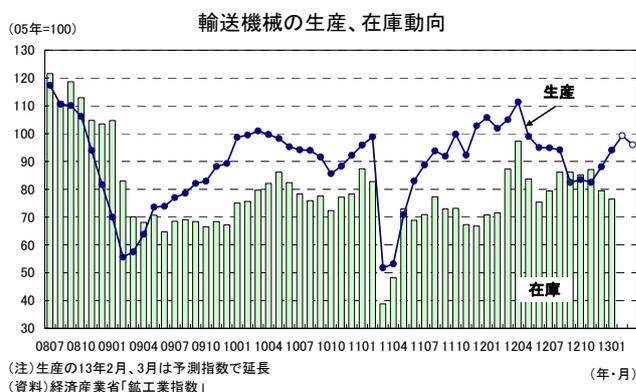
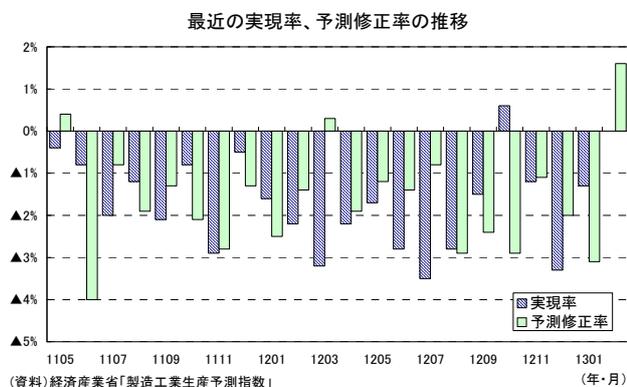
財が1.8%高い水準となっている。GDP統計の設備投資は12年10-12月期に前期比▲2.6%と大きく落ち込んだが、13年1-3月期は緩やかながら5四半期ぶりの増加となる可能性が高いだろう。

消費財出荷指数は12年10-12月期の前期比▲6.8%の後、13年1月は前月比4.5%となった。非耐久消費財は前月比▲0.1%と小幅な低下となったが、自動車の好調を反映し耐久消費財が前月比7.6%の高い伸びとなった。

2. 1-3月期は4四半期ぶりの増産が確実に

製造工業生産予測指数は、13年2月が前月比5.3%、3月が同0.3%、生産計画の修正状況を示す実現率（1月）、予測修正率（2月）はそれぞれ▲1.3%、1.6%となった。実現率は3ヵ月連続のマイナスとなったが、予測修正率は11ヵ月ぶりのプラスとなっており、生産の先行きをみる上では明るい材料といえる。

予測指数を業種別に見ると、2月は全ての業種が前月比で上昇となっているのに対し、3月は情報通信機械、電子部品・デバイス等5業種が前月比で低下となっている。ただし、いずれも2月の上昇幅に比べれば3月の落ち込みは小幅にとどまっている。また、生産底打ちの主因となった輸送機械は2月まで前月比5.5%と好調を維持した後、3月は同▲3.3%と減少に転じる見込みとなっているが、12月から2月までの3ヵ月で約20%の高い伸びとなった後（2月は予測指数で先延ばし）であること、1月の実現率（1.2%）、2月の予測修正率（2.2%）がともにプラスとなっていることからすれば、増加基調は崩れていないと判断される。鉱工業生産は輸送機械をけん引役として当面堅調に推移する可能性が高い。



13年1月の生産指数を2月、3月の予測指数で先延ばしすると、13年1-3月期は前期比5.9%の大幅上昇となる。輸出が引き続き低調な動きとなっていることには留意が必要だが、13年1-3月期が4四半期ぶりの増産となることはほぼ確実にとなった。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。